

明星大学所蔵『平家物語』絵本に

おける撥音表記についての一報告

柴田雅生*

一 はじめに

本稿で対象とするのは、明星大学が所蔵する『平家物語』絵本である。ここでは詳細な書誌は省略するが、江戸時代前期の書写と推定される優美な絵本である。残念ながら第一帖と第十二帖を欠くものの、残存十帖の保存状態は極めて良好である。

本文は、林原美術館所蔵等他の平家物語絵本・絵巻と同様、覚一本系統の流布本と見られ、章段構成も流布本、例えば元和九年片仮名交じり付訓十二行本や明暦二年版本などと一致する。各丁十行にて平仮名混じり文にて記され、ところどころに脱漏の箇所が見られる。全帖に渡り部分的に右傍に補入する場合が見られるが、それでも脱漏箇所のすべてに渡るのではなく、また、所謂奈良絵本・絵巻の一般的傾向と同様、抹消

の痕跡は認められない。本文を厳格に校訂するまでには至らなかったものと想像される。制作者に関する情報が不明であることもまた他の絵本・絵巻と同様である。

なお、本資料の仮名遣いは、おおむね近世初期通行の仮名遣いを反映していると見てよい。酒井憲二氏が『寛永諸家系図伝』について報告されたように、江戸初期の仮名遣いは『仮名文字遣』や『新撰仮名文字遣』に一致することが多い。本資料においても基本的に同じ傾向が見てとれる。

二 撥音表記の種類

この資料を用いて本稿において報告するのは、その撥音の表記である。本資料における撥音表記は、基本的に次の三種である。

- A 仮名「ん」による表記
- B 仮名「む」による表記
- C 無表記

それぞれの例を二、三挙げる。用例には、適宜句読点・濁点等を加え、C無表記については便宜上片仮名ンにて示す。

A 仮名「ん」による表記

・主上きこしめして、「そこにおいかなるめにもあはんは、偏に我あふにてこそあらんずらめ」とて、れうがんより御涙をながさせ玉ふ。(巻三・法印問答)

・御ざうし、「さてはばゞござんなれ。しかのかよはんずる所を馬のかよはざるべきやうや有。さらばやがてなんぢあんないしやせよ」との玉へば(巻九・老馬)

B 仮名「む」による表記

・なにもものしわざにやありけむ、ふるき都の内裏のはしらに、二首の哥をぞ書つけゝる、もゝとせを四かへり迄に過ぎにしおたぎの里のあれやはてなむ(巻五・都選)

・かくして、五千よきの勢共、わづかに三十きばかりに討なされ、うむかのごとくなるかたきの中をわつて出れ共(巻八・室山合戦)

C 無表記(片仮名ンにて示す)

・「父子共に過分のふるまひをすると見しにあはせて、あやまたぬ天台ざす、るざいに申おこなひ、剩たうけかたぶけうとするむほんの輩にくみしてンげるなり。ありのまゝに申せ」とこそその玉ひけれ。(巻二・西光被斬)

・我乗ッたりけるくらのまへわにをし付て、ちつともはたらかさず、くびかき切ッてすてンげる。(巻七・実盛最期)

このほかに、ハ行・バ行・マ行の四段動詞の所謂ウ音便形が、仮名「う」「ふ」によって表記される場合がある。

北山雲林院の邊にしのふでおはしけるが (巻二・新大納言死去)
都の御むすめの忍ふでおはしける所へ参りて (巻三・有王島下)
御ぜんの御もとに、しのふでおはしける (巻三・有王島下)
そうづの御むすめのしのふでおはしける御もとに参て

(巻三・有王島下)
風うへに火をかけやき上、一もみもうでせめん(巻四・大衆揃)
勸進帳をひきひろげて、たからかにこそよふだりけれ。

(巻五・勸進帳)
大音聲をあげて、「龍王や有」とぞよふだりける。

(巻五・文覚被流)
「人にしのふで、伊豆の御山に七日参ろうの心ざし有」とて

(巻五・伊豆院宣)
といふたをよふでこそ、はつねの僧正とはいはれ玉ひけれ。

(巻六・新院崩御)
少将、もしやと、一首の哥をよふで
木曾、有時、めのとのかねとををよふで (巻六・小督)

(巻六・廻文)
東西の山のねに、水せきこふで水うみにむかへるがごとし。

(巻七・火燧合戦)
平家三万よきが中へかけ入り、もみにもふで、火出る程にぞせめた
りける。 (巻七・俱梨迦羅落)

(巻七・一條原合戦)
高橋、入善をつかふで、くらのまへわにをし付
仁和寺のときは殿にしのふでましける所へ、参りこもられけり。

(巻七・一門都落)
今度も又うつの宮をたのふで下つたりければ
熊がへ、子そくの小次郎をよふで云けるは (巻七・一門都落)

(巻九・一二之駆)
入かへく、なのりかへく、もみにもふで、火出る程にぞせめた
りける。 (巻九・一二之駆)

(巻九・二度之駆)
かはら太郎、おとゝの次郎をよふでいひけるは (巻九・二度之駆)

六弥太をつかふで、「につくひやつが、みかたぞといはゞいせよ

かし」とて

(巻九・忠度最期)

六弥太をつかふで、ゆんだけ斗ぞなげのけらる。(巻九・忠度最期)
後にはくまの法師に尾中のほつけうをたのふでゐたりけるが

(巻九・重衡生捕)

持佛堂にほけ経よふでおはしける処へ

(巻十・千手)

「海上に出うかふだる時、風こはければとてとまるべきか。」

(巻十一・逆櫓)

源氏すでによど・かわじりに出うかふで候へば (巻十一・大坂越)

残り四騎は、馬をおしうでかけず、見物してぞいたりける。

(巻十一・弓流)

右に挙げたのは、本資料十帖中の全例であり、基本的に中世の表記を引き継いだものと推定される。次のような例も多数見られることから、仮名「う」「ふ」による表記は当該の語の語彙論的な特徴に基づくものと考えられよう。

爰にしなのゝ国の住人安藤武者みぎむね、その時の當職のむしや所にてありけるが、「何事ぞ」とて、太刀をぬいてはしり出たり。文覚よろこんでとんでかゝる。

(巻五・文覚被流)

但し、大將軍の矢おもてにすゝんで、傾城を御覽せられむ所を、手だれにねらうて射落せとのばかりごとゝこそ存候へ。

(巻十一・那須与一)

本資料における撥音表記の大半を占めるのは、Aの仮名「ん」による表記である。総計で五二八箇所用いられている。これに対して、B

の仮名「む」による表記は四六五箇所である。Cの無表記は、「去ぬる」などのように、漢字表記された語の活用語尾を送り仮名としてどのような扱つかという問題に関わり、単純に用例数を算出することは困難であるが、一五〇例ほどを見出すことができる。

三 仮名「む」による撥音表記

右に示した三類のうち、本資料において特徴的と言えるのはB「む」の仮名の用法である。まず、いくつかの例を原文の行取りのままに挙げてみる。前節と同じく、句読点・清濁を便宜的に付す。

① 去程に、成田五郎も出来る。土肥の次郎さね

平七千よき、色々のたさし上、おめきさけ

むでせめたゝかふ。大手いく田のもりをば、源氏

(巻九・八十五ウ・二度駆け)

② すゝむにをよばず。それよりして、かぢはら、

はうぐはんをにくみそめたてまつりて、ざ

むげんしてつるにうしなひたてまつた

りとぞ、のちにはきこえし。さる程に源

(巻十一・五十ウ・壇浦合戦)

③ べきか。時に、臣ら院宣をうけ給はつて、二たび

きうとにかへつて、くわいけいのはぢをきよめ

む。もししからずは、きかい・かうらい・天ぢく・しんだん

にいたるべし。かなしきかな、人王八十一代の御宇に

(巻十・二十九オ・請文)

には計百十五例ほど見られる。その大半は、漢字音と助動詞「む」「らむ」「けむ」等の表記である。

①はマ行四段動詞連用形の音便形、②は漢字音「譏」、③は助動詞「む」の表記である。さほど用例が多くはないものの、この三例のように、行頭に用いられる例が目につくのである。このほか、行頭に用いられる例

これらを統計的に処理した結果が次の表である。分類③には助動詞「む」だけでなく、「らむ」「けむ」等の類例を含めた。また、行中における位置をバーセンテージで示しているが、これは当該の仮名の位置をその行の総文字数で割ったものである。対比のために、仮名「ん」につ

表

ん ③	ん ②	ん ①	む ③	む ②	む ①	総計／位置
1429 51.6%	3432 48.0%	436 52.6%	157 40.7%	151 39.0%	157 51.3%	巻二
190 52.6%	489 48.7%	52 51.6%	22 28.1%	29 46.2%	14 47.1%	巻三
140 52.7%	417 48.7%	34 45.1%	9 49.8%	20 31.9%	22 42.5%	巻四
121 49.6%	386 47.3%	37 56.6%	21 51.5%	15 49.0%	14 62.1%	巻五
109 55.0%	334 49.4%	46 53.7%	24 47.4%	22 47.6%	14 43.8%	巻六
91 55.7%	279 43.8%	29 53.7%	9 71.3%	8 22.5%	8 64.8%	巻七
144 53.5%	357 46.6%	31 55.7%	11 52.0%	13 29.3%	18 61.5%	巻八
91 49.2%	231 49.0%	40 44.9%	11 59.1%	10 42.3%	12 37.8%	巻九
205 47.7%	251 51.0%	68 50.6%	18 27.6%	10 52.9%	30 51.5%	巻十
169 52.3%	319 50.5%	53 60.1%	17 19.5%	15 23.0%	12 51.3%	巻十一
169 50.4%	369 45.3%	46 53.1%	15 27.5%	9 29.2%	13 56.7%	

いても同様の分類（ただし、①については活用語以外の音便形も含めた）を施して集計した結果を合わせて示す。

これらの数値はあくまで目安に過ぎないが、仮名「ん」が平均すればおおよそ五十パーセントあたりに位置するのに対して、仮名「む」のうち、②漢字音と③助動詞「む」等においては平均で約四十パーセントとなり、行頭にいささか偏る傾向を見ることができ。前述したように、行頭用の例が目立つものの、さほど数値が小さくならないのは次のような例も見られるからである。

大ごく殿なからんうへは、太政官のちやうにて
行はるべきかと、公卿せんぎありしかば、九條

殿申させ玉ひけるは、「太政官のちやうは、ぼむ
人の家にとらば、くもんじよたいの所なり。」

（巻四・十三オ・還御）

また、巻別に見ると、撥音を示す仮名「む」が行頭に偏るのは、本資料全帖のうち後半部分にやや目立つ傾向が認められる。筆者の問題は慎重に検討しなければならないが、本資料における文字の筆跡には明確な差が見出し難く、前半部分と後半部分において筆者が交代した可能性を指摘するのは困難であろうと思われる。

四 おわりに

以上、明星大学所蔵の『平家物語』絵本における撥音表記の実態を報

告し、仮名「む」による表記が行頭に偏る傾向を有することを示した。このような行の上下による仮名の使い分けについては、所謂「仮名文字遣」との関わり、例えば、藤原基俊仮託の歌論書『悦目抄』に掲載される項目、

上にかゝざるん 下にかゝざるむ

などどのようなに関わるのか、興味が持たれるところである。この項目は基本的に語彙単位の文字遣いを示していると考えられるのであるが、この記載と仮名の使用実態がどのようにに関わり、また関わらないか等については別稿に期したい。

付記 本研究は、平成十九・二十年年度科学研究補助金・基盤研究（C）

「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」（課題番号一九五二〇一一四、研究代表者 山本陽子）による成果の一部である。

注

- （1） 科学研究費成果報告書（平成二十一年三月刊行予定）に掲載。また、本資料の翻刻・釈文等を次のサイトに掲載している。「奈良絵本・絵巻の世界―武士の物語絵巻をよむ」（URL <http://ehon.emakimono.ac.jp/>）
- （2） 高橋貞一校注『平家物語 上・下』（講談社文庫、昭和四十七年二月・六月）
- （3） 佐藤謙三校注『平家物語 上・下』（角川文庫、昭和三十四年五月・九月）
- （4） 「近世初期通行の仮名遣いについて―寛永諸家系図佐」仮名本の表記から―『国語と国文学』第七十七巻第三号、平成十二年三月）